

北島灯台の最期

太宰府市 清本 鉄男

澎湖島の馬公から約15Km離れた絶海の孤島というより岩の上にある北島灯台へ移ったのは昭和18年3月25日。官舎と事務所は馬公にあり、職員6名が半数づつ一週間毎に交代船で北島へ渡り勤務した。その他に台湾人の用務員が3名、灯台の炊事及び掃除に従事した。職員は灯台業務に専念していた。

交代船有明丸(19t)は、灯台所属船で、船長はじめ船員4名も灯台職員となり、灯台長の部下であった。

家族は馬公の官舎にいて、そこから子供達は近くの学校へ通ったが、日毎に空襲が烈しくなり、わずか半年にて休校となってしまった。

灯台は、島というより草一本もない岩の上に、高さ36mの鉄造りのものである。光力50万燭光で彭桂峙灯台には及ばないが、高さにおいては台湾一の誇りを持つ一等灯台である。

灯台構内には共同用の職員宿舎が1棟あり、食事は用務員さんが作ってくれたものを食堂に集まって戴く。

灯台構外には台湾人漁師の小屋が1軒あり、仮住いしながら堰堤に入る魚を捕まえて生活している。

海拔50mの灯室から双眼鏡で覗くと、出口を失った魚が堰堤の中をグルグル白い腹を見せながら泳ぎ回っているのが良く見える。鯉やバリの大群が良く入る。『運は寝て待て』と言うが、この漁師は出口を小網でふさいで潮の引くのを待つだけでOK。誠に気楽な漁法である。

周囲1km足らずの北島附近一帯は、干満の差が大潮の時は5mにも及び、魚はこの中に捕らえられてしまう。

灯台附設の無線電話にて澎湖郵便局と定時の連絡を取り、馬公にある灯台官舎に用事を伝える。漁師達の家族の住む島は白沙嶼(しょ)とあって北島から近い。潮が引いたら、2カイリの海上を物干竿1本で渡って帰る者もいる。

北島灯台赴任以来、物資はだんだん少なくなって何もかも配給になった。『灯台の火』をつけるための1ヵ月分のマッチ30本の特配申請のため、澎湖庁まで足を運ばねばならなくなった。日増しに戦争は激しくなるばかりで、馬公にも警防団が編成され、間もなく婦人の防空班が結成された。班長には若い頃小学校の先生をされた台長夫人が選ばれ、副班長に家内が命ぜられ、妊婦と病人以外の婦人は全員防空訓練に参加させられた。

昭和18年9月上旬、初の馬公大空襲にて澎湖庁、要港部等、大型爆弾に見舞われ、大損害を受けた。爆弾の威力は竹槍程度の人間力では何もならないことが判り、防空訓練は以後中止された。

空襲を知らせるサイレンは日に何回も出るようになり、敵機の波状攻撃が繰り返され、大型爆弾の洗礼を受けたが、立ち向う友軍機は次第に姿を消して行った。

主人である筆者が北島灯台勤務の留守中の空襲は、筆舌に尽せない戦慄を覚えた由である。

だんだん軍艦マーチは聞かれなくなり、『海行かば…』の悲しい曲がどこかの島の玉碎を知らせるばかりとなり、不安な毎日が続いた。

正月も後数日にせまった昭和19年暮、台湾には珍しい肌寒い日に南方行きの輸送船が次々に沈められた。御用船が馬公に入港するところを襲われ、撃沈と共に海に放り出された兵隊は機銃掃射され、ほとんど死んだが、手のない人、足を取られた人が次々に馬公小学校へ収容された。

いよいよ澎湖島は敵の上陸が強くなり、婦女子の強制疎開が決定した。米のできない澎湖島では子供達を餓死させねばならなくなるので、北島より私（筆者）が帰り次第、台湾本島の山奥へ疎開するべく準備していた。

最大の悲劇となった『悪魔の日』が遂にやって来た。昭和20年2月14日の朝、薄暗い中にウンウンと唸る敵機の来襲と同時にサイレンが鳴り響き、『空襲警報』が発令された。

定期便といわれる程、いつもの空襲は9時より始まるのに、どうしたものか早朝より開始された。いつもの威嚇とは異なり、胸騒ぎがするので急いで炊事場の火を消して防空壕へ入った。

飛行機の音が遠退いたと思うとまた低空でやってくる波状攻撃が長く続いた。

恐ろしさのあまり、子供達は泣き出す。雨上りのドロンコの壕の中で、それぞれ綿の入った防空頭巾を被り、身を寄せ合って、更にその上に布団を積み、息を殺して咳一つせず「今日が最後…」と震えていた。4人の子供を抱きかかえて妻は主人（筆者）のいない空襲を再度体験した。

対岸の海軍要港部石油タンクは、真黒い煙を吹き上げ、飛行機の格納庫は時々大きな爆発と共に黒い塊のような物が吹き上げられ凄惨な光景だった。

我が家は、壁は落ち天井には大きな穴ができ、青空が見えていた由。

その時、若い職員の高都さんが飛んで来て「北島灯台も爆撃されたいらしい。無線電話でいくら呼んでも応答が無い」と伝えた。

一方、北島灯台側では、台長、筆者、高橋君、用務員（台湾人）の4名が灯台勤務のため在島していた。どんより曇り、台湾には珍しい寒波が押し寄せ、異常低温となったために、近くの海上に20cmも30cmもある色々な魚が苦しそうに海面に浮き上がり、死にかけているのを発見した。

私（筆者）がこれをバケツに一杯拾い上げたところ、B24の敵機に発見され、機銃掃射を受けた。このため、急いで共同宿舎に飛び込み、押入れに入って布団を被り避難した瞬間、大型爆弾によって屋根は吹き飛び、布団の上に崩れ落ちた。

さらに、両足近くに飛んできた機銃の弾によって畳は黒く焦げていた。胡座の角度がもう少し広ければ両足貫通の運命だった。

幸いに台長には怪我は無かったが、高橋清治さん（灯光会特別会員）は爆弾によって耳が聞こえなくなり、以後難聴に苦しむ運命となった。

北島灯台共同宿舎よりわずか10mの砂地に大型爆弾の偉力を示す火山口のような穴がポツカリあき、灯台のレンズ、無線電話機は爆風にて全滅、瞬時にして、廃灯と化してしまった。

明治35年6月より不滅の慈光を放ち続けて来た台湾総督府の北島灯台、いや日本の北島灯台の最期となってしまった。

無線電話機を失い、住む家を奪われた台長以下筆者等4名は、貯水タンクの水を捨て、この中に隠れ、救援を待つことにした。

交代船・有明丸は救援を急いだが連日の空襲で出港できず、3日後の17日未明、職員3名、用務員2名を乗せて出港した。この時、防空訓練帰りの白沙嶼警防団員（いずれも台湾人）30名を便乗させたために、軍用船と思ったのか、出港後間もなく、約1時間に近い空襲を受けた。

海の若者揃いの警防団は全員海中に飛び込み、大型爆弾の水圧によって全滅。灯台職員の船長、高都さん、用務員の3名即死。機関長、安慶名さんの2名負傷。さらに機銃掃射はシリンダーを打ち抜き、遂に船は運航不能となり、ブリッジのみ見える水船となって、漂流、敢え無い最期となった。

10日後に高都氏の死体は近くの島に漂着し、火葬の上、お骨を郷里へ送ることができたが、船長はついに何等の手掛かりも無かった。台湾本島より孤立してしまった澎湖島は、特別の任務につく者ばかりとなり、有明丸船長（富浦氏）及び灯台職員、高都氏の葬儀はわずかの日本人にて淋しい『野辺の送り』となってしまったことはあまりにも惨めで申し訳し無かった。

台湾総督府最高のセレモニーとして遇されるべきであり、また、灯台127年史に残すべき御魂である。安らかに成仏されよ！！ 合掌。

註

一、戦災復旧

昭和21年5月1日、中華民国委任官となって、澎佳嶼灯台戦災復旧のため再度赴任、澎佳嶼灯台最後の日本人の灯台長を勤めた。

二、自然退官

昭和21年11月26日、裸一貫の無一物となってしまったが、家族全員7名（内子女5名）元気で、無事郷里福島（現在の串間市）へ帰還した。『国敗れて山河あり』。祖国日本、佐世保の土を踏みしめた時、筆者35才。あれから海上保安官となり、49年の歳月が流れ、84才の馬齢を重ねている。